

---

# 魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～

群雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは遙かなる悟空伝説

### 【Nコード】

N1124BA

### 【作者名】

群雲

### 【あらすじ】

一星神龍との戦に決着をつけた悟空が神龍と一緒に消えた先は・  
・そんな物語始まります

## 異世界（前書き）

どうも、新参の群雲ですこんにちはッス  
とりあえず悟空、異世界突入編です

## 異世界

### 第一話 異世界

「これ以上ドラゴンボールを使わせる訳にはいかない」  
世界の危機を救った戦士たちに目の前な緑色の巨大な龍は告げる。  
いままでことあるごとにその龍の持つ奇跡と呼べる力に助けられ頼  
つてきた、

それがこんな銀河系未曾有の危機に陥るとも知らず

「さあ、いくぞ孫悟空」

そしていざなう、これまで五十以上の年月にて幾度も世界を救つて  
きた男、孫悟空を

「ああわかつてる、じゃあオラ行ってくる」

「父さん行くつてどこに!」「カカロット…貴様!」

困惑する仲間たちをよそに男は目の前でその巨大な頭部を差し出し  
ている緑色の龍「神龍」にむかつていく

「バイバイみんなー」

神龍の頭部に乗つかるとそのまま手を振りながらまるで『また明日  
遊ぼうな』といわんばかりな笑顔で神龍とともに大空へと消えてい  
った。

「なあ神龍、オラちよつと寄り道してえんだけど」

そう神龍に『頼み』を言った悟空はそのままかつて競い合った友、  
そして殺し殺された友に会う。

そしてまた空を昇っていく、雲を超え、神の神殿のある天界を超え  
た頃

「神龍つてあつたけーなあ、オラなんか眠くなっちまった」

だんだんとぼやけていく視界、徐々になくなっていく身体感覚に  
悟空は神龍に乗ったまま目を閉ざした

鳴海市のとある公園

時刻は朝5時を過ぎた頃、日が昇り始め、あたりを薄く照らし始めた頃だった

毎日の日課としてランニング途中の公園で稽古をしていた親子がいた一人は大学生くらいの若い青年、高町恭矢もう一人はその父親である高町士郎である。

「父さん、次こそ一本取ってやるからな」

「はは、まだまだお前には負けられんからな手加はなしだぞ！」

「その自信も今日までだぜ父さん」

「よし、いくぞ！」

いざ始めようとしたその時である、急にあたりが暗くなったのである「なっ、どうなってんだこれは朝だったのに真夜中みたいに暗くなっしまった」

「きよ、恭矢！あれを見る！」

あたりが真っ暗闇に包まれたことに驚いた恭矢だったが、それとは別のものに驚いた士郎がそれをかき消すかのように恭矢を呼んだ龍がいた。西洋の物語に出てくるような胴体手足があるというのではなく、胴体はとて長く東洋の伝承にあるような巨大な緑色の龍であった

「.....」

さっきまで稽古だと意気込んでいた恭矢は目の前に広がる非現実な光景に言葉を発せずにいた

士郎の方も言葉すら出なかったものの恭矢よりは冷静であった、彼は見逃さなかったのだ目の前の龍からなにか小さいものが下りていくのを。それを見つけた瞬間、龍は激しい閃光を放ち消えてしまった

「父さん龍が.....」

「ああ消えてしまったな.....」

そう返した土郎は突然歩き出した、なにかに引き込まれるように籠  
が居たほうへと

## 異世界（後書き）

えーやっちゃんいました

とりあえず悟空たちのからみは二話

戦闘は三話からッス

ではではまた

交差する(前書き)

とりあえず勢いにかまけて第2話  
とりあえず話すすまねえ



## 交差する

### 第二話 交差する

公園の裏にある雑木林の奥

「待ってくれよ父さん」

「.....」

高町父子の二人はひたすらに進んでいた、正確には黙々と歩いていく父である士郎に息子の恭矢がついて行っているのだが。

「父さん！」

「.....」

先ほどから恭矢の呼びかけにも無反応の士郎は周りを見渡ししながら数歩あるいた後その足を止めた

「.....恭矢」

「なっ、なんだよ」

恭矢は先ほどから返事がなかった父親から急に声をかけられ戸惑ったがすぐに持ち直し

「さっきの龍なんだが、あるとき小さい光のようなものが龍の頭から降りていったような気がしたんだが.....おまえもなにか見なかったか？」

「?なにかつて、そんなもの.....!!」

ガサガサ

首をかしげながら返答に困っていた恭矢であつたが後ろの茂みから物音が聞こえ、すぐさま臨戦態勢に入った。

「もしかして父さんが言つてた奴か!? 突然夜になつたりいきなりでけえドラゴンが出たり、もう何が出てきても驚かねえからなあ!」  
構えを取りながら朝から起こったき奇妙な出来事にやや愚痴るように言い放ち今現在も音のする茂みを睨みつけている

「恭矢! 少し冷静になりなさい」

そういう土郎だが息子と同じく先ほどの体験が多少なりとも尾が引いているのだろうか、眼光は普段の稽古以上に鋭くそこに纏う空気もかなり張りつめたものだった。

ガサガサガサガサ「……………」

音は激しさを増していき二人の緊張の糸は徐々に張りつめていったそして

ふわふわ

「……………」

ふわふわ

「……………は？」

現れたものに二人はそろってまさしく文字どおり「氣」の抜けた声を出した

そこには一人の少年が『あお向けに横たわっていた』、

気を取り直して高町家の大黒柱である土郎がその少年を「観て」みようと思った

歳は背格好から見て10歳前後だろうか末子の「なのは」とあまり変わらないくらいだ。

胸元の 亀の字が入った山吹色の変わった道着、こちら辺の道場ではまず見ないだろう。

そしてそのわきには少年のものであるう赤い棒と中に赤色の星が4個入ったオレンジ色の水晶が転がっていた

ここまでではいい、そうここまでならただの迷子として警察に届けを出すなりすればいい

だが問題はこの少年の「状態にある」

今この少年は『あお向けに横たわっている』のだ、この状態でなぜこちらまで近づくことができたのか、それは

「父さん、俺はさっきからの騒動は実は夢なんじゃないかって思う

んだが」

「恭矢．．．父さんも同じことを考えたところだ、だが実際に起きてしまってるんだから仕方がない」

二人の目線は同じところを向いていた、少年の背中．．．いや今少年を支えているものにくぎ付けになっていた

「．．．．．」

先ほどと同じようにだが違う意味で生唾を飲み下した二人だがついに動いた

「．．．．．ふわふわだ」

そう仰向けになつて眠っている少年を支えている『雲』にふたりは同時に吸い込まれるように触れてみたのだ

「どうなつてんだ？綿みたいにやわらかいのになんかそれでいてある程度の弾力がある」

右手で押ししたり引いたりを繰り返す恭矢

「黄色い雲なんて見たことも聞いたこともない．．．いやでもどこかで？」

考え込みながら両の手で撫でている大黒柱の士郎、二人が雲について考えてると突然雲が動き出した

二人が見ている中、その雲は少し離れた位置まで移動すると全身をくねらせるように動いていくすると『ドサ！』という音を立てて少年を地面に落とした

「何してんだあいつつてこら、やめろつて」

状況がいまいちつかめない恭矢、だが雲がいきなり恭矢をその全身を使って少年のほうへと押し出していく

「おいやめろつて！くそなんでこんなに気持ちいんだああ押すなあ  
！！」

「そうか、そういうことか」

目の前のやり取りを眺めていた士郎は雲の行動にある一つの答えを導き出した。ならすることは一つ、士郎は雲の前まで近づきそこで片ひざを着き雲の上にやさしく手を置くと

「君はこの子を私たちに託そうとしているんだね？」

士郎はまるで子供をあやすように声を出した。

雲は士郎の周りをグルグル回るとも似た位置で数回跳ねた、それを見た恭矢は

「なんか犬みたいだな、まるで雲には見えない」

などと微笑みながら雲を撫でていると

クオーン　バヒューン

まるでよろしくといった感じに雲は遠くの空に飛んでいく、それを眺めた後ふたりは少年を見つめて

「しかたない、あの人懐っこい雲に免じてとりあえず家まで運ぶか」

「父さん」

すっかり癒された二人はその少年を運んでいく

なのはSIDE

わたし、高町なのは9歳。私立聖祥大付属小学校の3年生、昨日友達のアリサちゃんとすずかちゃんとでケガをしていたフェレットを動物病院に連れて行ったんだけど

病院の先生から飼い主さんのことを聞かれたときにみんなで探してあげられないか、それがだめなら私たちのだれかが飼ってあげられないかという話になったのですが、アリサちゃんは犬を飼っているからだめで

すずかちゃんは猫を飼ってるからだめみたいです。なのでわたしは今日お母さんたちに相談してみることにしました

「おはよう」

「ギャー」

二階の部屋から一階に降りたとき、道場のほうからものすごい悲鳴が聞こえてきました

急いで駆け付けてみると

「なんだおめえぜんぜんよわっちなあ」  
「ぐっく、こんなはずじゃ」  
「まったく、油断しているから情けない」  
「お父さんとお兄ちゃんとおと．．．」  
「ん？おめえだれだ？？」  
知らない男の子がいました

S I D E   E N D

時はさかのぼり、なのはが起きる1時間前

「「ただいま」」

高町家に父子は帰ってきた

兄、高町恭矢の背中には例の雲から預かった少年が背負われていた。

父、高町士郎が扉を閉めると家の奥からパタパタと音が聞こえてくる

「お帰りなさい恭矢、あなた」

迎えた人物は高町桃子、このいえの中心人物といっても過言はない  
というくらいに権力を持つひとである、二人を出迎えた桃子であつ  
たが恭矢の背中を見ると

「あらあらあら」

なにやら嬉しそうに笑い始めた

士郎はこの顛末をある程度かいつまんで説明した。巨大な龍のこと、黄色く人懐っこい雲のこと、そしてこの少年を家で引き取らな  
いかというはなしを

「とにかくまずはこの子が起きてからなのだがな」

士郎は少年のいる道場を見つめながら言う、なにせまだどんな子な  
のかどころか名前すらわからないのである。

「うん．．．ん？あれ、オラどうしたんだ？なんか夢え見てた  
気がしたんだけどなあ」

目を覚ました少年はあたりを見渡して

「どこだ？ここ」

一面木造の部屋なのだがやけに広く見慣れない部屋に首をひねっている

「おっ目が覚めたか！」

「ん？」

一人の青年が部屋に入ってきた、恭矢である。恭矢は少年に近づき目と目を合わせた

「よう、気分はどうだ？」

「おう、悪くねえぞ」

「えーと俺の名前は恭矢、高町恭矢おまえは？」

「オラ、孫悟空だ！」

「へ？」

順調な会話のキャッチボールだったのだが少年・・・悟空の名前を聞いた恭矢の言葉が止まった

「すごい名前だな」

「あつ父さん！」

ついで入ってきた土郎の言葉で恭矢の止まった時間は動き出した

「きみは悟空君というんだね、すこし話したいことがあるんだがいかな？」

「ん？オラ別にかまわねえぞ」

道場に悲鳴が上がるまであと30分

## 交差する（後書き）

悟空の装備品なりなんなりと突っ込みどころありますが  
4話か5話くらいにほのめかしくんで今のところ説明なしです  
とりあえずこんな文章ですが感想待ってます  
ではまた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1124ba/>

---

魔法少女リリカルなのは～遥かなる悟空伝説～

2012年1月3日00時51分発行